

「キャンパスの風」

田 淵 結

「関西学院」「関西学院大学」という名前だけで、私たちの学校がキリスト教主義を建学の精神としていることをどれだけの人たちに理解してもらえるだろうか？たとえば「沖縄キリスト教学院」「茨城キリスト教学園」「国際基督教大学」、あるいは関西学院大学と早くから交流を持っているインドネシアの「サティヤワチャナキリスト教大学」のような校名であれば、その学校の理念は一般に理解されやすいことだろう。また関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”、校歌『空の翼』、シンボルとなる新月の校章や大学のエンブレムなど、どれをとっても直接的にキリスト教を感じさせるものでもない。あの入学式に出席してはじめて、関西学院がキリスト教主義による学園であることを知った学生諸君も多かったのではないだろうか。

関西学院の持つキリスト教主義は、このように正面から大上段にそれを掲げ、自分たちの理念を強く訴えるという形をとっていない。むしろこのキャンパスに集い、その時間を過ごすうちに、本学のさまざまなシンボル、表現などの意味を受け止め、触れてゆくなかで、「キリスト教主義による理念」が学生諸君のものとなってゆくというあり方が展開されている。

スパニッシュ・ミッション・スタイルによるキャンパスデザイン、時を定めて響くチャイムの調べ、そこにも諸君が何かを感じるメッセージが込められている。スクールモットーであるMastery for Service、この言葉を聞いたことのない学生はいないだろう。そのServiceという言葉の意味とは何だろう。「使えること」「奉仕」「社会貢献」などと訳されるが、もともとその言葉は「神への奉仕」、つまり「礼拝」という意味を抜きには考えられない。このモットーの提唱者であった第4代院長であり初代学長となったカナダメソヂスト教会宣教師ベーツの生き方から見ても、彼はこの言葉に社会的意味と同時にキリスト教的メッセージを込めたことは当然であった。

さて、関西学院生にもっとも愛された校歌『空の翼』。作曲は関西学院の同窓である山田耕筰、作詞は山田の友人であった北原白秋。その近代日本を代表する二人の手による作品そのものもまた、直接的にはないが、そこに関西学院が掲げるキリスト教による理念、主義を「風に思う空の翼」と歌い始められる全曲を通じ表現されている。

昨年、学院創立者ランバス生誕150年と上ヶ原キャンパス開設75周年を記念して、上ヶ原キャンパスのシンボルである時計台二階ホール全面を用いて、関西学院キャンパスについての展示を行った。設計者ヴォーリズの働きを紹介する展示なかで、その中心となったものは時計台二階正面の窓をすべてを開け放ち、中央芝生から大阪梅田方面向へと遠く開けてゆく「展望」だった。その窓辺から吹き入れてくるさわやかな風、その風を受けながら上ヶ原からはるかに広がる世界へと、学生諸君はやがて自らの翼を広げて羽ばたいてゆくことだろう。これこそが『空の翼』の意味を実感させる光景だが、そこで感じる風こそ、古く聖書の世界に生きた人たちが「神の息」として感じたものだった。その息に触れて私たちは、常に新しい生命に満たされ、力を感じ、「神の守りと支え」を直接に感じ取っていた。旧約ヘブル語、新約ギリシャ語、どちらも「風」という単語に「(神の)息」という意味があり、さらに「聖霊(Spirit)」とも訳される。キャンパスを吹き抜ける風を私たちが感じる時、私たちは常に新しい生命と力とを吹き込まれていることを。

5月、キリスト教ではクリスマスと並ぶ大きな祝祭の季節、ペンテコステ(聖霊降臨日)を迎える。新約使徒言行録の記事によると、復活したイエスはやがて天に昇り、その直後地上に残された弟子たちの上に「聖霊が降った」。それによって弟子たちが新しい力を与えられてキリスト教伝道のため、全世界に向けての活動を開始したことを記念する時。関西学院大学に集う学生みなさんが、大いに関西学院キャンパスに吹く風を感じ、それによってひとりびとりの未来への新しい展望、ビジョンが大きく開け、それに向かった歩みがはじまろうとしていることを実感して頂きたい。

(大学宗教主事)